

山梨県北巨摩郡須玉町

蟹坂遺跡

KANISAKA SITE

株式会社ミラプロ本社第4棟建築に伴う発掘調査報告書

2001

須玉町教育委員会
特定非営利活動法人
文化資源活用協会

序

株式会社ミラプロが平成6年、須玉町穴平に設立、建設に伴い、町教育委員会による埋蔵文化財発掘調査を実施し、平安時代の遺構及び遺物など貴重な文化財の発見を見ました。加えて、平成12年5月に第4棟建築に伴う発掘本調査の結果、前回と同時代の遺構や干支の「卯」のとしを墨書きした土師器をはじめ、たくさんの遺物の出土によって、当時を偲ぶ大切な資料を得ることができました。

最後に発掘調査及び報告書作成にともない、県文化課、株式会社ミラプロの各位、また、調査にあたっての御理解と御協力を頂いた関係者の皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成13年3月

須玉町教育委員会

教育長 藤巻 宣夫

例　　言

- 1 本報告書は、株式会社ミラプロ本社第4棟建築に伴う盤坂遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 遺跡は山梨県北巨摩郡須玉町穴平1070番地外に所在する。
- 3 試掘及び本調査、遺物整理、報告書作成は株式会社ミラプロの依託により、須玉町教育委員会が主体となり、特定非営利活動法人文化資源活用協会が行なった。
- 4 本書の執筆、編集は山路恭之助、深沢裕三が行ない、DTP編集は早川慶が行なつた。
- 5 本調査の出土品・諸記録は須玉町教育委員会が保管している。
- 6 発掘調査組織

調査主体　須玉町教育委員会　教育長　碓井正明（発掘調査時）

藤巻宣夫

調査担当者　須玉町教育委員会　文化財係　山路恭之助

調査員　深沢裕三

- 7 遺物の復元、接合、注記、拓影は、浅川英光、望月小夜子、小沢久恵、八卷まさ子、深沢照明、深沢直江、岡本英史、岡本文美が行ない、実測・トレース及び図面作成は小尾裕美子、浅川佐知子、三井ちぐさが行なった。

- 8 発掘調査参加者

浅川英光、深沢照明、深沢直江、小沢久恵、八卷まさ子、岡本英史

岡本文美、中田千波、坂本ちよき、篠原昭子、伏見徳芳、伏見節子

宮崎夏子、花輪照子、石川モトコ

目 次

序

例 言

目 次

第1章 調査状況

(1) 調査の実施と経緯	1
--------------------	---

第2章 遺構と遺物

(1) 1号住居跡	6
(2) 1号住出土遺物	7
(3) 2号住居跡	9
(4) 2号住出土遺物	10
(5) 3号住居跡	11
(6) 3号住出土遺物	12
(7) 挖立柱建物跡	14
(8) 暗渠	14
(9) 縄文時代及びその他の遺物	15
卯の年の出来事	17

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡立地図	3
第3図 遺跡立地詳細図	4
第4図 遺跡全体図	5
第5図 1号住居跡	6
第6図 1号住出土遺物 -1	7
第7図 1号住出土遺物 -2	8
第8図 2号住居跡	9
第9図 2号住出土遺物	10
第10図 3号住居跡	11
第11図 3号住出土遺物 -1	12
第12図 3号住出土遺物 -2	13
第13図 挖立柱建物跡	14
第14図 暗渠	14
第15図 縄文時代及びその他の遺物	15
第16図 縄文時代及びその他の遺物 - 石器	16

図版目次

- 図版 1 1. ミラプロ本社第4棟建築予定地調査風景
 2. 1号住居発掘風景
- 図版 2 1. 1号住居跡
 2. 1号住居内坏出土状況
- 図版 3 1. 2号住居跡
 2. 3号住居跡
- 図版 4 1. 捩立柱建物跡
- 図版 5 1. 1号住出土遺物 -1
- 図版 6 1. 1号住出土遺物 -2
- 図版 7 1. 1号住出土遺物 -3
 2. 2号住出土遺物
 3. 3号住出土遺物 -1
- 図版 8 1. 3号住出土遺物 -2
- 図版 9 1. 縄文時代及びその他の遺物 -1
- 図版 10 1. 縄文時代及びその他の遺物 -2
- 図版 11 1. 縄文時代及びその他の遺物 -石器

第1章 調査状況

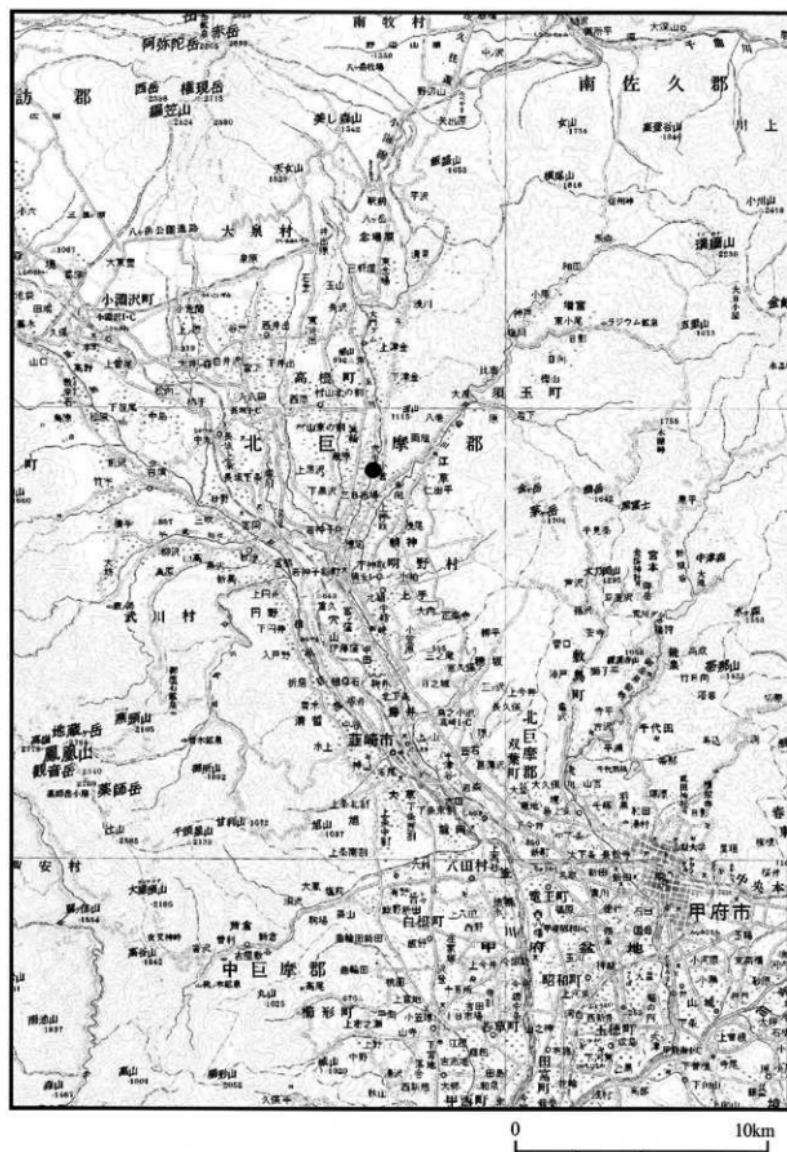
(1) 調査の実施と経緯

本調査は、ミラプロ本社4号棟建築予定地と、将来増築予定地内(約2400m²弱)で試掘坑22ヶ所から得られた層序と層厚に留意しながら、重機によって遺物包含層の褐色土の上の耕作土を削除した後を、鋤簾によって精査を繰返しながら、遺物と遺構の検出に努めた。

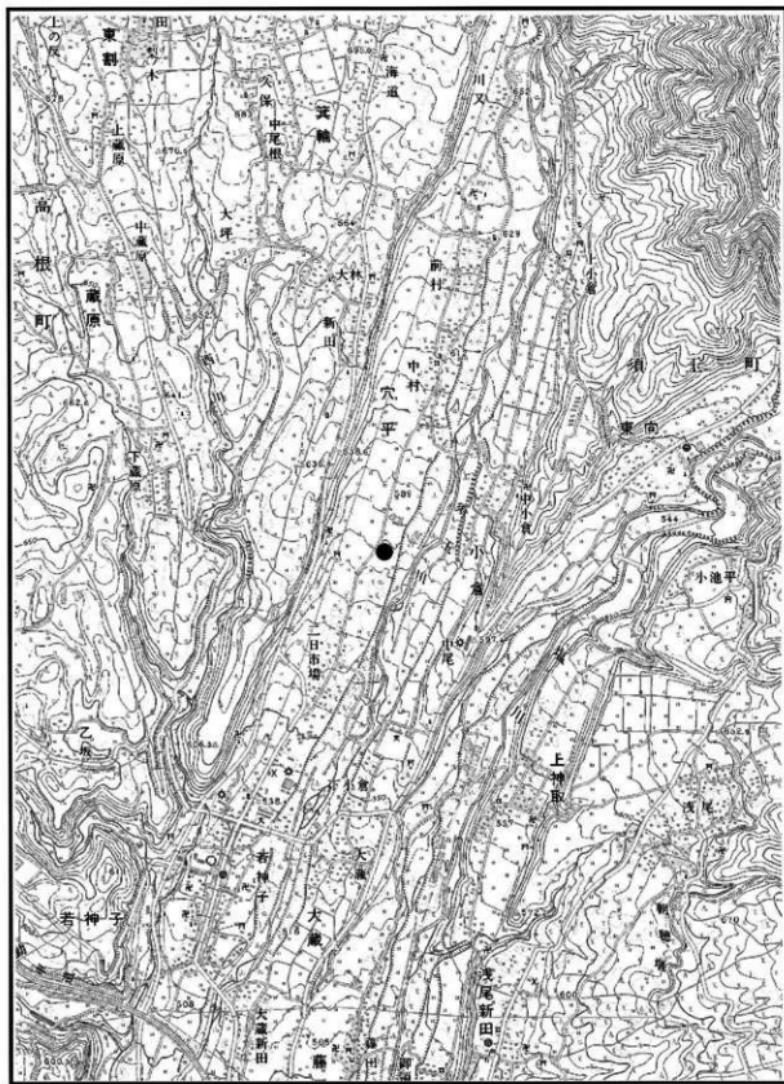
敷地内に流れている水路(堰)を県道沿いに移すために、急速、県道際の約500m²の一枚の田の表土剥ぎと精査を行った結果、耕作土下は疊層が厚く堆積しており、遺構の検出には到らなかった。出土遺物は現在調査中だが、縄文時代から近世に亘る小片が散逸的に収集できたに過ぎなかった。又、調査地域北側に約3m幅に溝を掘り、コンクリート壁を埋設するため、統いて精査の重点を移す。調査地域北側の東端から中央の疊地帯までは、次期増築地に当たり遺物出土する土壤は肥沃だったが、遺構は検出されない。出土遺物は、疊地から東側では最大幅5.5cmで厚さ2cmの黒曜石片(図版11 S-6)、粗製土器で深鉢底部(図版10 P-15)の他、平安時代の土師器坏か皿の口縁片、甲斐型カメの破片、タタキ目痕が鮮明な須恵器カ美片(図版10 P-13)等67点が出土している。西側では、縄文時代中期末葉に比定される、ハの字文を施した深鉢片2片(図版9 P-5, P-7)、同時期のX字状渦巻把手(図版10 P-14)、平安時代では暗文がある甲斐型土師器坏片等、中世では天目茶碗片(図版10 P-10)、北宋錢(図版9 F-1)があり総数467点を数える。



ミラプロ本社第4棟試掘風景

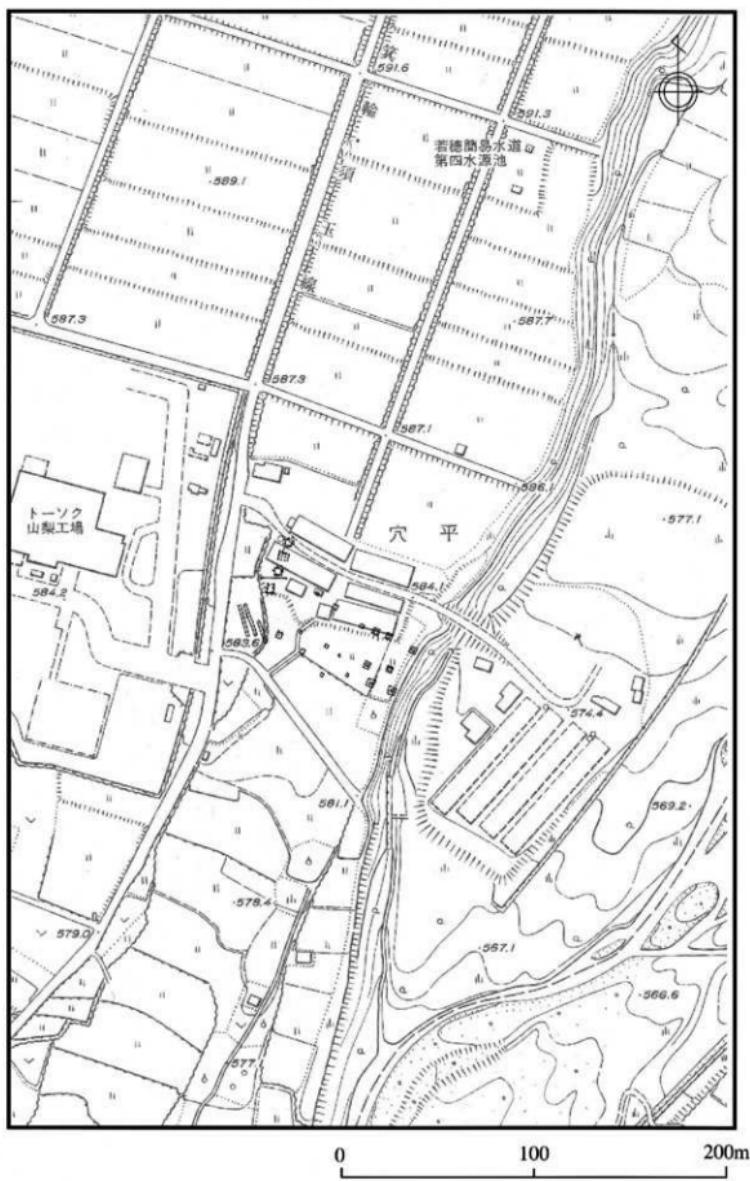


第1図 遺跡位置図 (1/200000)

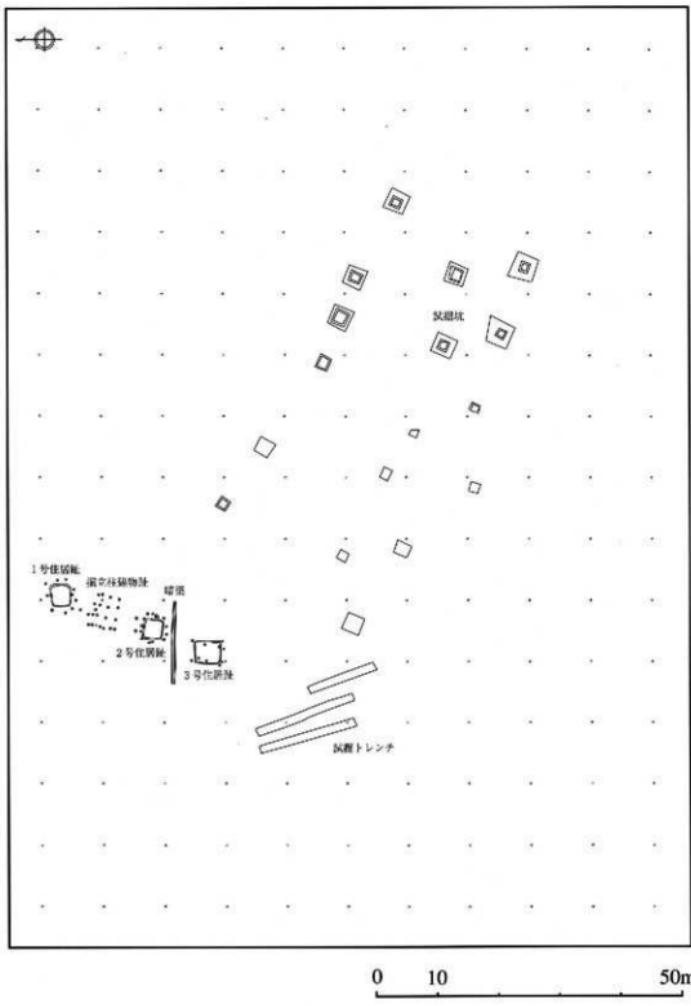


0 1km

第2図 遺跡立地図 (1/25000)



第3図 遺跡立地詳細図 (1/2500)

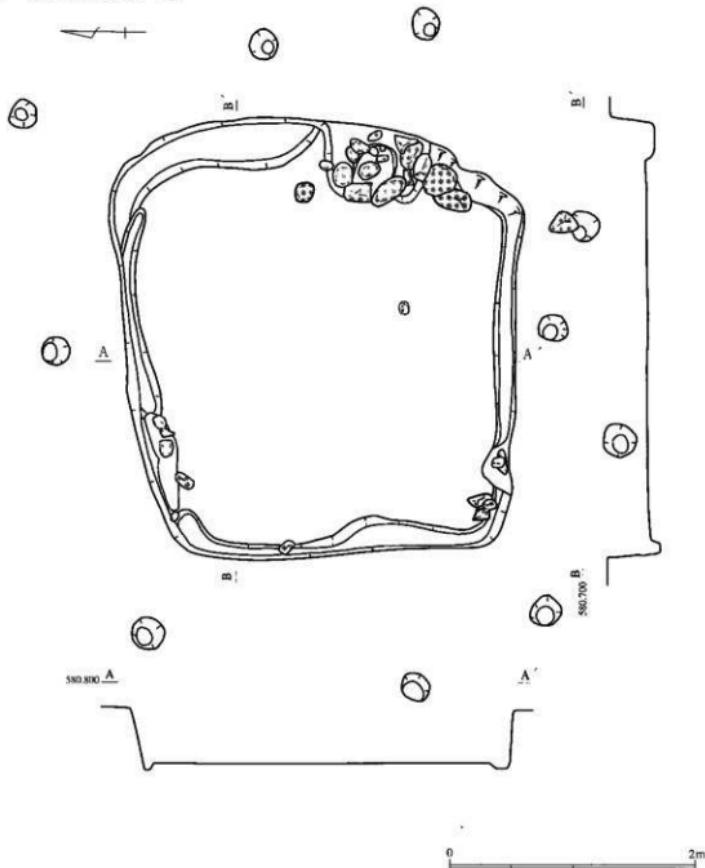


第4図 遺跡全体図 (1/800)

第2章 遺構と遺物

(1) 1号住居跡 (第5図 図版2)

遺構の規模は、長軸3.6m 短軸3.15mを測り、隅丸方形を呈し周溝が全周する。住居内の柱穴は認められず、カマドは東壁の中央からやや内寄りに位置し、規模は長軸80cm 短軸70cmを測り、扁平な天井石が燃焼部の上に遺存し、両袖石各3ヶと補強材として用いられた灰色粘土が両袖石の外郭に認められた。支脚も遺存していた。床面は確認面から36cmの深さにあって、褐色上の床面は全体に堅固である。カマド前の床面上に130×110cmの範囲で焼土とカーボン粒子が認められた。周溝の直上或は8~10cm上で炭化粒を多く含む焼土塊が、東壁隅、北壁と西壁下で検出、特に西壁下の焼土は棚状を呈し、8cm~25cm堆積していた。住居跡を囲んで10ヶの柱穴が認められた。柱穴の径は24~25cmを測り、深さは30cm~60cm穿かれていた。



第5図 1号住居跡 (1/40)

(2) 1号住出土遺物 (第6,7図 図版2,5,6,7)

住居内出土遺物は56点余あるが、実測及び拓影した皿、壺、羽釜及び置きカマド等について記述する。(順不同)

P-1 完形の甲斐型皿が、西壁の遺構確認面から28cmの深さ、床面から10cmの高さで、壁に貼り付いた状態で出土した。口径11.8cm、底径5.0cm、器高2.9cmが測られ、体部に「丸」の墨書きが見られる。底部と外面下半部は手持ちヘラ削り調整されている。

P-2 左袖石に寄りかかるように逆位で出土した小形壺で、口径11.5cm、器高11.0cm、底径8.6cmが測られ、胴部中央から肩部にかけて最大径11.1cmを測る。底径は8.6cmで無調整で網代痕が見られる。体部外面は全面ヘラ削りで、内面はナデ、色調は黒褐色を呈し、胎土は荒く、脆い。

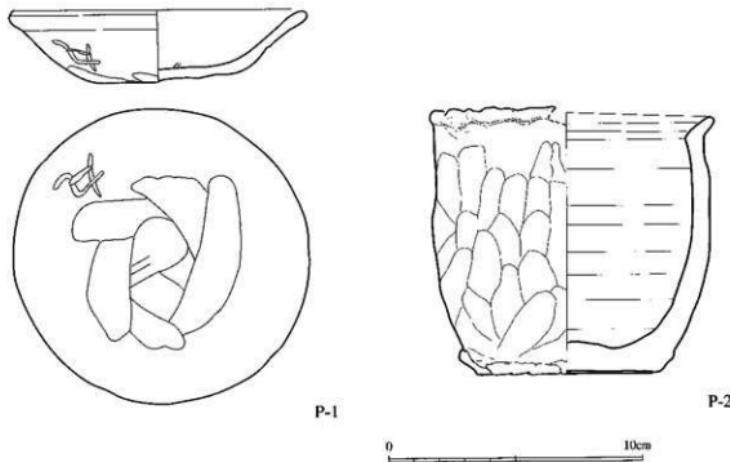
P-3 木葉痕が認められる不整形底で底径は9cmが測られる。

P-4、P-5、P-6は厚口縁型壺で、P-7、P-8、P-9、P-10が末広口縁型壺の口縁部破片である。

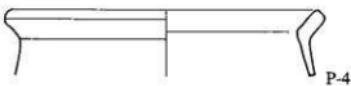
P-11 羽釜の鋸突出部が約4.5cm、厚さ1.5cmの大型羽釜で、鋸径は推定40cm、口径33cm以上と思われる。

P-12 置きカマドの底の一端を残す釜孔の破片で、外面は縦ハケ目、内面横ハケ目を施し、底は斜め上方に突き出で、釜孔の径は推定27.6cmが測られる。

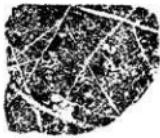
甲斐型羽釜の時期が甲斐編年XI～XIII(11世紀第3四半期～11世紀第1四半期)(註1)であること、甲斐型置きカマドの出現時期をVIII期(9世紀第4四半期)とし、XIII期(11世紀第1四半期)が消滅期と思われている。一号住から出土した置きカマドは貼りつけ底を有する釜孔の一部なので、正確な形状の把握は困難だが、共伴遺物からXI～XII期あたりと思われる。次に手持ちヘラ削りを施される甲斐型皿がXI期以降からXIII期で消滅すること(註2)等々から、一号住跡が10世紀後半から11世紀初頭の時期と思われる。



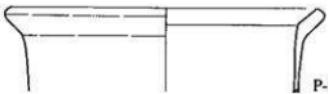
第6図 1号住出土遺物-1 (1/2)



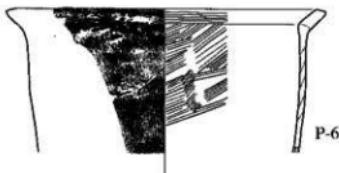
P-4



P-3



P-5



P-6

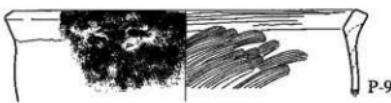


P-7

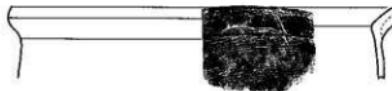
0 10cm



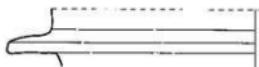
P-8



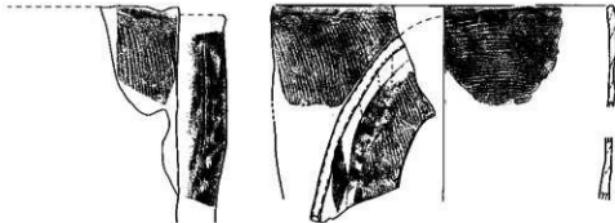
P-9



P-10



P-11



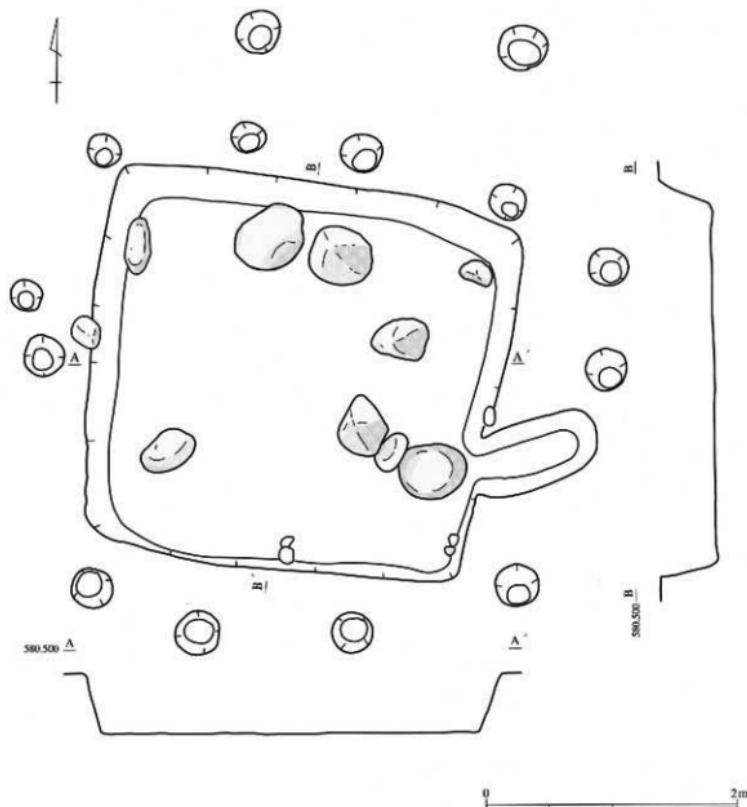
P-12

第7図 1号住出土遺物-2 (1/4 P-7のみ1/2)

0 10cm

(3) 2号住居跡 (第8図 図版3)

1号住居跡の南に位置し、規模は長軸3.3m短軸3.1mが測られ、隅丸方形を呈する。周溝、カマド、柱穴等は認められず、床面には最大幅40~60cmの河原石が数個、遺構の確認面から40~45cm深さに露出している。住居跡を囲んで12ヶの柱穴が穿かれ、柱穴の径は25~30cmが測られ、深さは30~45cmであった。



第8図 2号住居跡 (1/40)

(4) 2号住出土遺物 (第9図 図版7)

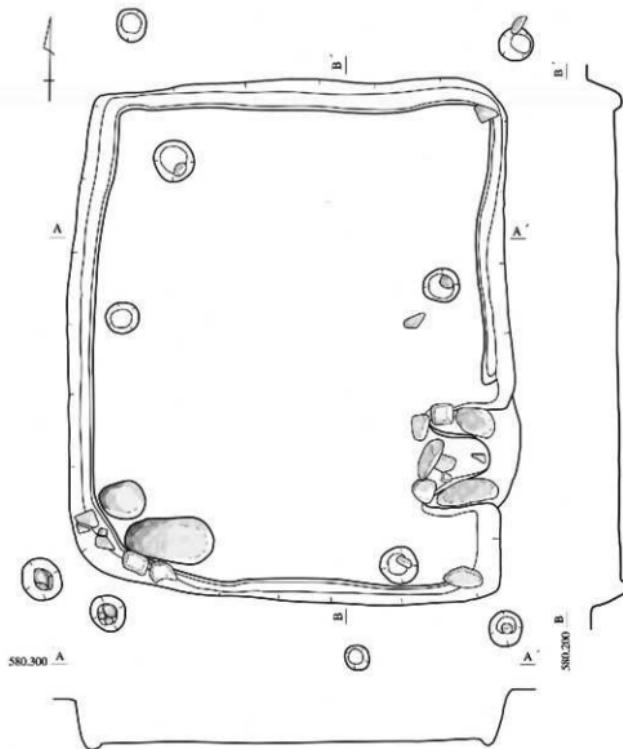
平面形は隅丸方形を呈するものの、住居趾としての付属施設を持たない2号住からは、半口縁の深鉢片で斜位繩文が外面に、櫛歯状横位沈線文を内面に施した小片の他は凡て平安時代の上師質土器片で22片と少ない。甲斐型環(皿)の底部片P-1は、糸切り後へラ什上げを底と外面下半部に施され、P-2は甲斐型カメの口縁片で、縁の長さ2.7cm、厚さ0.8cmの薄口縁型で宮間田Ⅱ期～Ⅲ期(9世紀第4四半期～10世紀第1～3四半期)(註3)に比定され、資料は少ないが、2号住がこの時期のものと思われる。



第9図 2号住出土遺物 (1/2)

(5) 3号住居跡 (第10図 図版3)

2号住居跡の南約5m離れて位置し、長軸4.2m短軸3.7mの規模をもつ隅丸方形の住居跡である。周溝は全周し、壁高は西が12cmと低く、北、東壁は20cm、南壁が25cmを測る。覆土は暗褐色土と灰褐色が混じ合った土壌で湿っぽい。床は固くしまって、カマドの右袖石脇とカマド前、そして南壁そばの床面にカマド袖石の補強材に使われたと思われる白色粘土が塊で検出された。カマドの規模は長軸80cm短軸70cmが測られ、燃焼部壁下に天井石が崩落しており左右各2ヶの袖石と支脚が遺存していた。燃焼部は床面を8cmほど掘り込み楕円を呈する。床面は固くしまっており、住居跡内から4ヶの柱穴が認められた。住居跡の外周の各コーナーに4ヶのビットが穿かれ、西壁の外側の確認面から2ヶのビットを検出した。北壁の西隅には巨石と丸礫が住居の廃絶後に崩落したものと思われ、住居跡確認時の覆土上層から大形カメ口縁部片が出土した。又、カマド燃焼部からも、大形カメ口縁部片と平口縁と胴部破片が出土している。



第10図 3号住居跡 (1/40)



(6) 3号住出土遺物 (第11,12図 図版7,8)

60点余の遺物から実測できた壺と甕及び置きカマドについて記述する。

P-1 在地系の壺の一部で、推定口径13.2cmで底径は5.6cm、器高5.3cmと思われ、底／口径比は40%である。

P-2 在地系の内黒壺で、一部欠損するが、ほぼ完型に近い。口径12.8cm、底径5.3cm、器高4.2cmで底径／口径比は約41%が測られる。大部には「卯」と墨書きされている。9世紀初頭から12世紀半ば過ぎまでの「卯」のとしについて別記する。

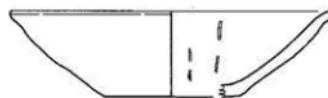
P-3 ロクロナデの後内黒処理を施した鉢の器体下半部と底部を遺存し、底径9.6cmが測られる。(註4)

P-4 大型内黒壺の口縁～体部破片で、推定口径20.2cmで内面に暗文が認められ、外面は赤褐色を呈する。(註5)

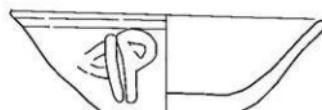
P-5 置きカマドの側面部の破片と思われる。推定口径は約34cmで、外周は縦ハケ目が内壁は横ハケ目とナダが施され、指痕が残る。(註6)

P-6 厚口縁型甕の口縁～胴部破片で、推定口径23cm、鉢の長さ20mm、厚さ13mmを測る。置きカマド片と共に3号住カマド内から出土し、共にカマド構築材として用いた土器である。

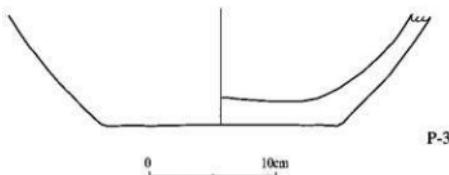
P-7 北壁の西隅から出土した大形厚口縁型甕は推定口径29cm、鉢の長さ22cm、厚さ10mm、器壁厚5mmが測られる。内黒壺、墨書きされた壺と厚口縁型甕等から3号住は10世紀第1四半期から第3四半期の時期と思われる。



P-1

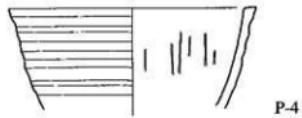


P-2

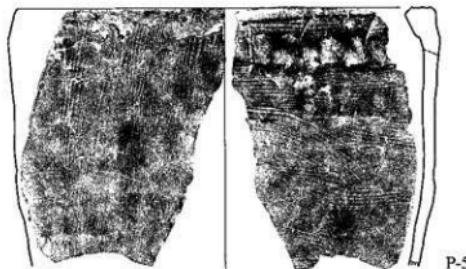


P-3

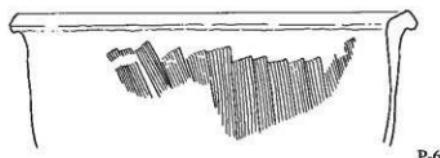
第11図 3号住出土遺物-1 (1/4 P-2のみ1/2)



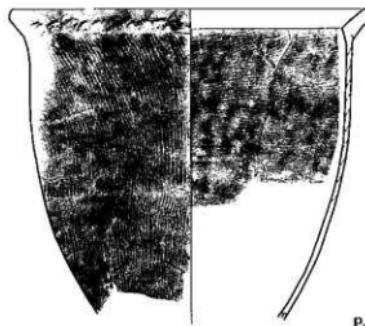
P-4



P-5



P-6



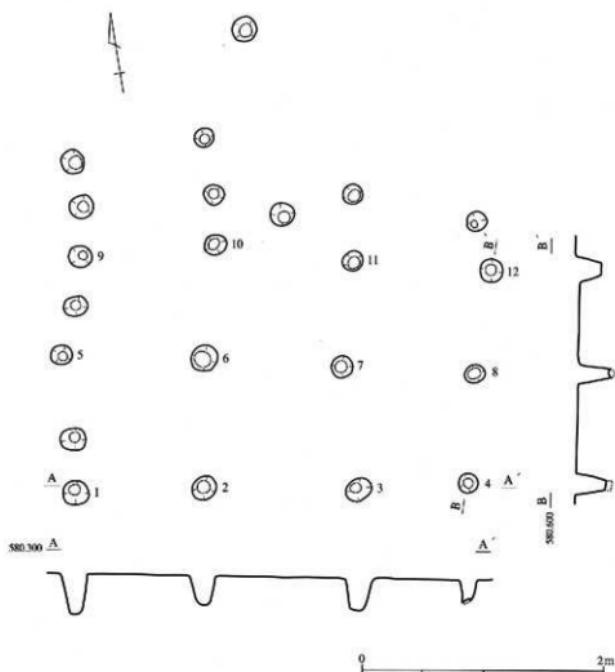
P-7

0 10cm

第12図 3号住居出土遺物-2 (1/4)

(7) 挖立柱建物趾 (第13図 図版4)

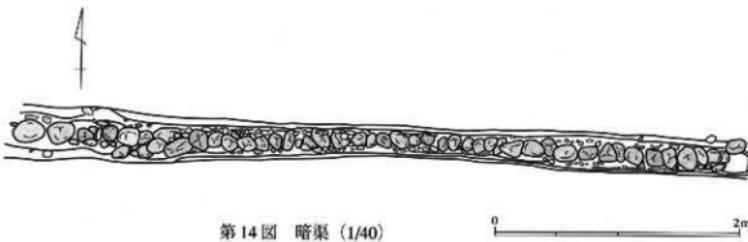
2号住の北側4.5m距て、立地する南向き3間×2間の総柱式建物趾である。北側に軒の柱穴と思われるピット3が検出されている。柱穴の直径は20cmと25cmが殆どだが30cmが2ヶ認められた。柱穴の深さは、底部に石があるものは浅く20~25cmを測り、石がない柱穴は40~50cmと深い。伴出する遺物がないため時期は不明である。



第13図 挖立柱建物趾 (1/40)

(8) 暗渠 (第14図)

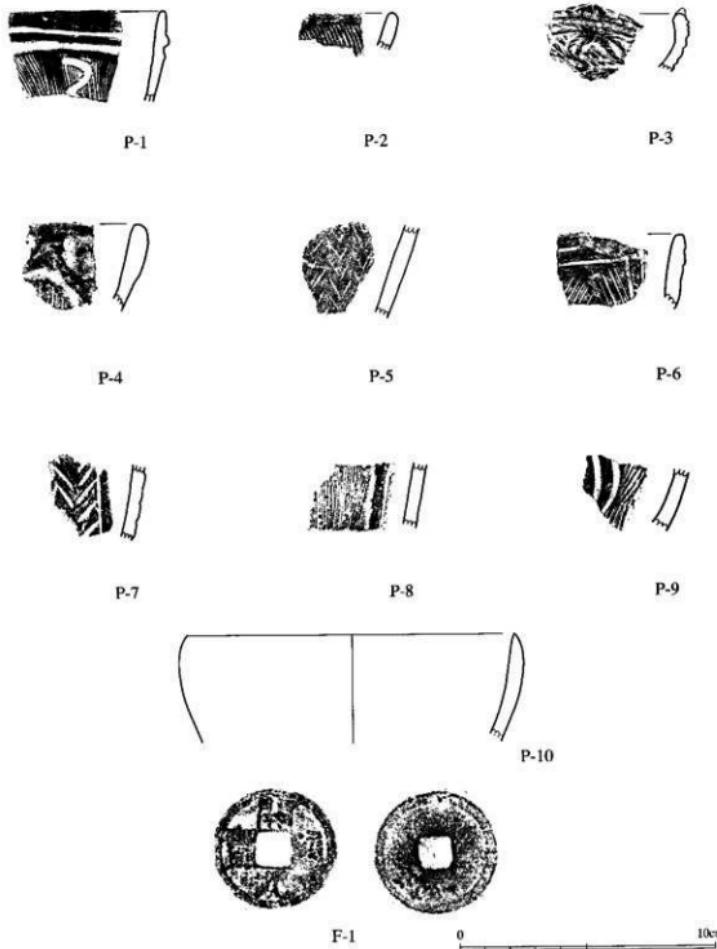
3号住の南に東西に延びる暗渠は、幅40cm長さ13mが測られた。2段の袖石の上に不整形で扁平な石が蓋石として用いられ、水路の幅は12cm深さ10cmを測る。



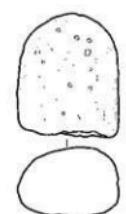
第14図 暗渠 (1/40)

(9) 繩文時代及びその他の遺物 (第15,16図 図版9,10,11)

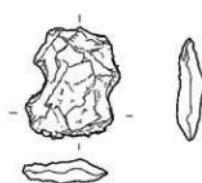
平安時代の竪穴住居趾の覆土中から、それぞれ1片ずつの縄文上器片P-1とP-2が出土している。共に後期に比定されよう。他は動態による精査中に検出されたもの内、無文の深鉢片や磨耗が著しい上器片は除いた。縄文時代前半、中期末、後期土器片等である。古銭は北宋錢の開通元宝で、背文に年号の一字或いは地名の一時を付してあるが、腐蝕がひどく、判読できない。石器は安山岩製石棒片S-1、粘板岩製分銅型石斧S-2、砂岩製短冊型石斧S-3,S-5、そして粘板岩製短冊型石斧S-4が出土した。



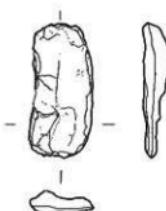
第15図 縄文時代及びその他の遺物 (1/2 F-1のみ 1/1)



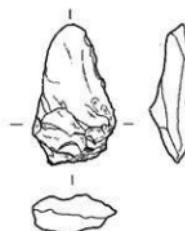
S-1



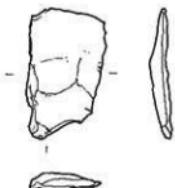
S-2



S-3



S-4



S-5

0 10cm

第16図 繩文時代及びその他の遺物・石器 (1/4)

卯の年の出来事（9世紀～12世紀中葉）

干支	西暦	年号	甲斐編年	年代	山梨郷土史年表、自山国民社読める年表より
辛卯	811	弘仁二年	V期	9世紀第1四半期	嵯峨天皇の代、唐風文化興隆天台・最澄、真言・空海活躍
乙卯	835	承和二年	VI期	9世紀第2四半期	諸国守の在任中の不正を防ぐため任期四年に改訂する
己卯	859	貞観元年	VII期	9世紀第3四半期	前年858年天安二年清和天皇九歳で践祚
癸卯	883	元慶七年	VIII期	9世紀第4四半期	陽成天皇誕生即位、光孝天皇践祚
丁卯	907	延喜七年	IX期	10世紀第1四半期	聴坂牧貢馬見る（日本紀略）
辛卯	931	永平元年	X期	10世紀第2四半期	甲斐駒率（楊義抄）
乙卯	955	天暦七年	XI期	10世紀第3四半期	聴坂駒率（西宮紀）
己卯	979	天元二年	XII期	10世紀第4四半期	975（天延三年）甲斐、信濃など4国に檢査使を派遣して諸牧の御馬や牧内の雜事を検査させる（類聚符宜抄）
乙卯	1015	寛仁元年	XIII期	11世紀第1四半期	御馬逗留する（日本紀略）
己卯	1039	長曆三年	XIII期	11世紀第2四半期	真衣野、徳坂駒率60足（楊義抄）
乙卯	1075	承保二年	XIV期	11世紀第3四半期	源義光の子、義清生まれる（小笠原系図）
己卯	1099	康和元年	XIV期	11世紀第4四半期	藤原師道開白、帝中に田楽流行る
癸卯	1123	保安四年	XV期	12世紀第1四半期	五歳の幼帝崇徳天皇践祚。白河法皇の尊制政治
丁卯	1147	久安三年	XV期	12世紀第2四半期	1145年、茲見表れ年号を久安に改正
己卯	1159	平治元年	XV期	12世紀第3四半期	平治の乱起きる。平清盛が鎮定し、都の軍事権を握る

9世紀初頭から12世紀半ば過ぎまでの「卯」のとしの中で、墨書きされた壺、内黒壺、厚口縁型壺等から、3号住は10世紀第1四半期から第3四半期の時期と思われる。

(註1) 甲斐型土器その編年と年代 (1992) 羽釜 森原明廣

(註2) 甲斐型土器その編年と年代 (1992) 堂 保坂康夫

(註3) 武川村宮間田遺跡報告書 (1988) 武川村教育委員会

(註4) 武川村宮間田遺跡 62号住出土 90図-12

(註5) 高根町東久保遺跡 6号住出土 図番 74-5

(註6) 武川村宮間田遺跡 38号住 47図-5

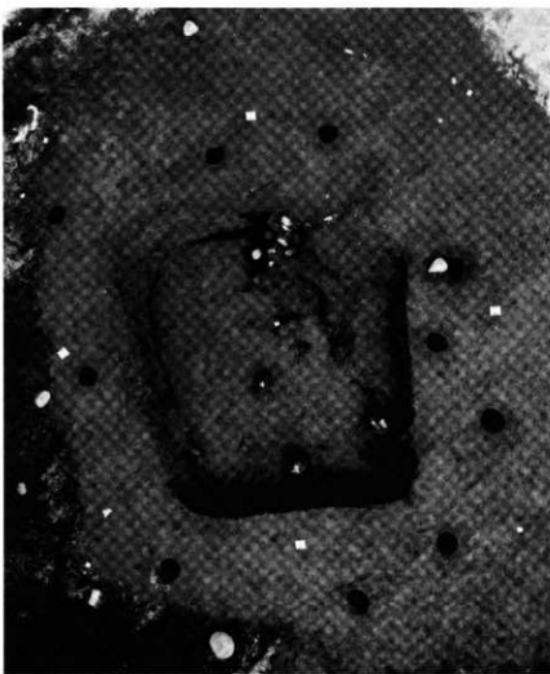
写真図版



1. ミラプロ本社第4棟建築予定地調査風景



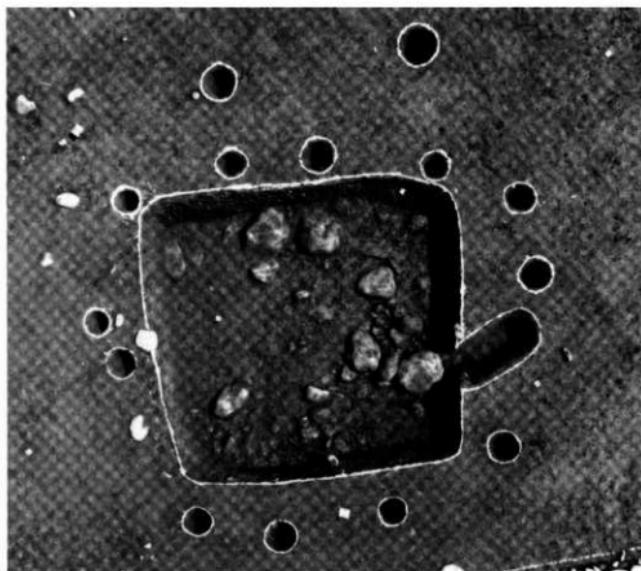
2. 1号住発掘風景



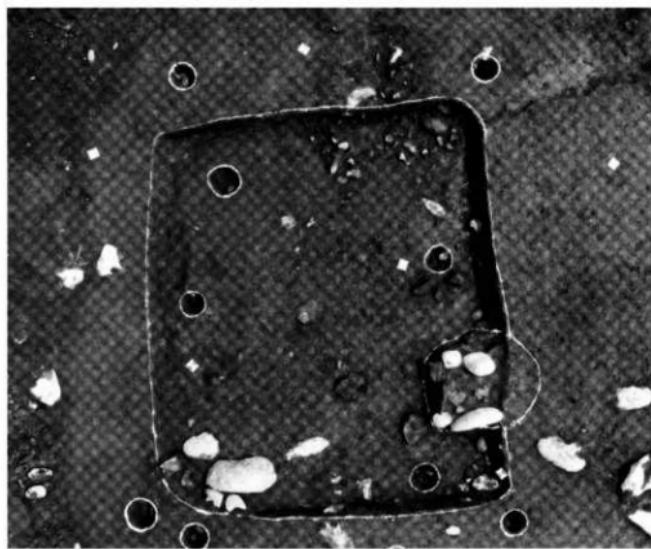
1. 1号住居址



2. 1号住居内坏出土状况



1. 2号住居跡



2. 3号住居跡



1. 挖立柱建物趾



P-1 (内)



P-1 (底部)



P-1 (横)



P-1 (墨書)



P-1 (底)



P-2 (口縁部)



P-2



P-3 (底)



P-3 (内)



P-4



P-5



P-6



P-7



P-8



P-10



P-9

图版7



P-11



P-12

1. 1号住出土遗物 -3



P-1



P-2

2. 2号住出土遗物



P-1



P-2



P-3



P-4

3. 3号住出土遗物 -1



P-5

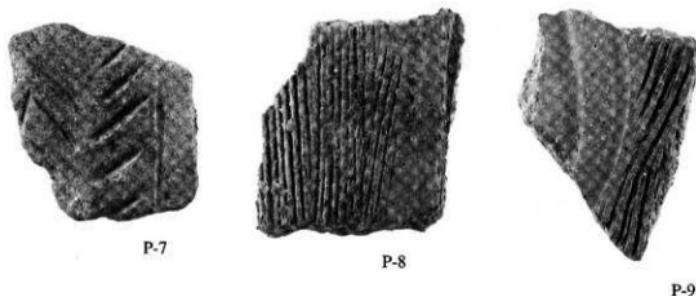


P-6



P-7

1. 3号住出土遺物 -2



1. 縄文時代及びその他の遺物 -1



P-10



P-11



P-12



P-13



P-14



P-15



S-1



S-2



S-3



S-4



S-5



S-6

出土地点	番号	揮柵番号	種別	器形	口径 cm	底径 cm	高さ cm	調整	胎上	色調	備考
1号住	P-1	6	土器	皿	11.8	5.0	2.9	ヘラケズリ		赤褐色	墨書「丸」系きり
	P-2	6	土器	小型甕	11.5	8.6	11.0	ヘラケズリ ナデ	荒く、脆い	黒褐色	網代痕
	P-3	7	土器	鉢	-	9.6	-		金雲母 石英	赤褐色	底部に木柴痕
	P-4	7	土器	臺(口縁部)	25.2	-	-			灰褐色	
	P-5	7	土器	甕(口縁部)	25.0	-	-		金雲母 白色粒子	灰褐色	
	P-6	7	土器	甕(口縁部)	26.0	-	-	ハケ		灰褐色	スス付着
	P-7	7	土器	臺(口縁部)	-	-	-			褐色	
	P-8	7	土器	甕(口縁部)	25.2	-	-	ハケ	白色粒子	にぶい褐色	
	P-9	7	土器	臺(口縁部)	29.6	-	-			褐色	スス付着
	P-10	7	土器	甕(口縁部)	31.0	-	-	ハケ		暗褐色	
	P-11	7	土器	羽釜	33.0	-	-		白色粒子	褐色	
	P-12	7	土器	置きカマド	27.6	-	-	ハケ		赤褐色	
2号住	P-1	9	土器	坏(底部)	-	4.3	-	ヘラケズリ		褐色	糸きり
	P-2	9	土器	甕(口縁部)	-	-	-			明褐色	
	P-1	11	土器	坏	13.2	5.6	5.3		白色粒子	灰黄	内黒、暗文
	P-2	11	土器	坏	12.8	5.3	4.2		白色赤色 粒子	灰黄	墨書「卯」 内黒、糸きり
	P-3	11	土器	鉢(底部)	-	9.6	-	ロクロナデ	白色赤色 粒子	橙	内黒
	P-4	12	土器	大型坏(口縁部)	20.2	-	-		白色粒子	灰黄	内面に暗文 内黒
	P-5	12	土器	置きカマド	34.0	-	-	ハケ、ナデ			指頭痕
	P-6	12	土器	甕(口縁部～ 腹部)	32.0	-	-				
	P-7	12	土器	臺	29.0	-	-				
	P-1	15	土器		-	-	-				
	P-2	15	土器		-	-	-				
	P-3	15	土器		-	-	-				
その他	P-4	15	土器		-	-	-				
	P-5	15	土器		-	-	-				
	P-6	15	土器		-	-	-				
	P-7	15	土器		-	-	-				
	P-8	15	土器		-	-	-				
	P-9	15	土器		-	-	-				
	P-10	15	陶器		13	-	-				天目茶碗
古銭				分類	直径	孔経	厚さ	重さ			備考
F-1	15	古銭	北宋銭	2.4	0.6	0.14	3g				開通元宝
石器				分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材		備考
S-1	16	石器	石棒	-	8.0	5.6	805g	滑石、安 山岩製			
S-2	16	石器	分脚型石斧	8.3	6.8	1.8	190g	粘板岩製			
S-3	16	石器	短脚型石斧	11.3	4.8	1.3	180g	砂岩製			
S-4	16	石器	短脚型石斧	11.3	6.6	2.9	310g	粘板岩製			
S-5	16	石器	短脚型石斧	10.5	5.8	1.4	130g	砂岩製			
S-6	16	黑曜 石片		5.5	4.3	2	46g				

報告書抄録

ふりがな	かにさかいせき
書名	蟹坂遺跡
副題	株式会社ミラプロ本社第4棟建築に伴う発掘本調査報告書
シリーズ名	
著者名	山路恭之助 深沢裕三
発行者	須玉町教育委員会
編集機関	特定非営利活動法人 文化資源活用協会
所在地・電話	〒407-0322 山梨県北巨摩郡須玉町下津金2963 電話 0551-20-7100
印刷所	株式会社 ヨネヤ
発行日	2001年3月30日
ふりがな	やまなしけんきたこまぐんすたまちようあんだいら
所在地	山梨県北巨摩郡須玉町穴平1070番地外
位置	北緯 35° 48' 12.3" 東経 138° 26' 5.8" 標高580
調査原因	株式会社ミラプロ本社第4棟建築
調査期間	2000年4月18日～5月19日
調査機関	特定非営利活動法人 文化資源活用協会
調査面積	2400m ²
時期	縄文時代,平安時代,中世,近世
主な遺構	1号住居跡,2号住居跡,3号住居跡,掘立柱建物跡,暗渠
主な遺物	縄文土器,土師器,須恵器,内黒土器,開通元宝
特記事項	

蟹坂遺跡

—株式会社ミラプロ本社第4棟建替に伴う発掘調査—

平成13年3月30日

編集 特定非営利活動法人文化資源活用協会
発行 須玉町教育委員会
印刷 株式会社ヨネヤ

